

## 2019 年度野球規則改正・規則適用上の解釈と要点解説

日本高等学校野球連盟  
審判規則委員会

注：( ) 内数字は今回改正された 12 項目の符号

- (1) 軟式野球の使用ボールの規格が一部変更になった。
- (2) ダブルヘッダーの第 1 試合の終了後から第 2 試合の開始までの、インターバルの時間の変更があった。これにより、同【注】も整合された。
- (3) 捕手を相手に許される準備投球の数と時間の制限がなくなった。高校野球では、高校野球特別規則 29 を設定して、従来どおり「8 球以下 1 分間を越えてはならない」として制限を設けることとした。
- (4) いわゆるフライングスタートは、正規なリタッチの方法ではなく、アピールがあればアウトになることが追加された。
- (5) 項目名の変更があった。
- (6) 監督が 1 度投手のもとへ行き、その後同一イニングで同一投手へ、同一打者のとき、警告にもかかわらず監督が行った場合、(2)の変更により、リリーフ投手に必要な準備投球が許されることになった。
- (7) 原文に忠実に、メジャーリーグで適用されるマウンドに行く回数の制限が追加された。日本の各団体は、それぞれの特別規則等を継続運用する方針から、【注】を新設することにした。高校野球では、すでに高校野球特別規則 15 で定めている。
- (8) 打者または走者が、アウトになった後、帰塁したり正規の占有していた塁に戻ろうと試みた行為があっても、それだけでは相手の守備を妨害したことにはならないことが追加された。
- (9) ダブルヘッダーにおけるフォーフィットゲーム（没収試合）の適用で、(2)の変更と整合させるため、時間の変更があった。
- (10) アピールの消滅の基準は、すでに 5.09(c)（アピールプレイ）で記載されているため、削除となった。これにより、同【注 2】を繰り上げ【注】とした。
- (11) 投球カウントの誤りの訂正基準が追加された。試合に携わっている者であれば、誰でも訂正できる。（審判員自身、また記録員も 9.01(b)(2)【注】により審判員に助言できる）
- (12) 観衆の妨害において、競技場内に物を投げ込んだ場合でも適用されることが追加された。

### 規則適用上の解釈

（下記は、プロ・アマ合同野球規則委員会で確認された規則適用上の解釈です。）

#### 5.09(b)(1) ラインアウト時の「触球行為」の解釈について

「触球行為」とは、①単に野手がボールを保持した状態でその保持されたボールが収まったグラブ或いはボールを掴んでいる手で走者にタッグしに行くことに限らず、②打球（送球）を処理して、ボールを保持した状態の野手がステップしただけで走者の方向を向いた場合でも、たとえば手を差し出す行為がなくても、アウトにしようとする行為だと審判員が判断できれば「触球行為」とみなすことを確認した。

例えば、野手が走者にタッグしようとしたとき、その走者がタッグされまいとしてすでに大きく走路から外れていた場合、②の解釈によりアウトが宣告できるということである。